濾胞性リンパ腫におけるCD10測定の注意点と診断基準の問題点

○林田　雅彦,奥村　敦子,福塚　勝弘,岸森　千幸,竹岡　加陽,弓場　吉哲
小橋　陽一郎(天理よろづ相談所医学研究所)

CD10の発現は，濾胞性リンパ腫（FL）で高頻度に認め，特にマントル細胞リンパ腫との鑑別に有用である．しかし，その発現量は症例により異なり，使用抗体の感度によっては，陽性の判断を誤ることがある．今回，CD10抗体の感度比較と，当施設での抗体変更によるCD10検出状況を調べたので報告する．また，染色体分析を含めて，診断基準の問題点についても考察する．

【対象および方法】

抗体の感度比較は，CD10陽性細胞株を対象に，抗体希釈試験にて7種類（FITC：2，PE：5）について行った．

FLにおけるCD10の検出状況は，1995年から2003年にCD10をFCMにて検索した57例を用いた．なお，CD10抗体は1998年まではFITC標識抗体（FITC）を，1998年以降は別のFITCおよびPE標識抗体（PE）を用い，10%以上を陽性とした．また，染色体異常を認めた41症例について，bcl-2過剰発現に関連する18番染色体の異常（18番異常）についても調べた．

【結果】

抗体の比較では，PEは5種類ともFITCに比べ感度が高く，S/N比で2～6倍の差を認めた．PEの5種類の中でも差があり，2種は感度・親和性共に高く，他の3種は感度もしくは親和性が低かった．なお，当施設で用いているPEは共に高かった．

FL症例におけるCD10の検出は，98年以前は5/16例（32%），以降はFITCで28/41例（68%），PEで23/28例（82%）と高感度抗体への変更に伴い上昇したが，陰性例も存在した．染色体異常を認めた41症例中CD10陽性は36例，18番異常は31例であったが，共に認めなかったのが4例（約10%）存在した．この4例の中には，腫瘍細胞の多様性も考慮する必要があるが，現在の診断基準では，他の病型を含む可能性が示唆された．

【まとめ】

FLでのCD10検出率は，高感度な抗体の使用によっても82%に留まった．CD10，18番異常共に認めない症例が約10%存在し，これらの症例には他の病型を含む可能性を考慮すべきと考えられた．

連絡先　0743-63-5611(8776)